

午後の談話室

第23回

外国語学部 ドイツ語学科

マティアス・ビティヒ 准教授

Matthias WITTIG

ベルリン自由大学修士課程、筑波大学大学院 人文社会科学研究所博士課程(留学)、ベルリン自由大学博士課程修了。ベルリン自由大学 非常勤講師、上智大学 嘱託講師を経て、2015年より本学専任講師、19年より現職。博士(日本学)。

趣味:

バスケットと読書。学生のみなさんも、もっとたくさん本を読んでください!

好きなマンガ:

『スラムダンク』(ドイツでは、あまり人気が出ませんでした……)。

好きな音楽:

ヘビメタ。メタリカ、イン・フレイムス! 研究室にはギターもあります。

ストレス解消法:

ゲームとNetflix。



『Identität und Selbstkonzept』
(IUDICIUM, 2016)

自伝から見える物語

人生と、その背景に触れる

「自伝というものは、ある人間が、自らの人生を振り返って書くものです。そして自分が歩んできた道を解釈する。ときには自分の存在を大きく見せたり都合の悪いことを小さく描いたりしますが、私が特に注目するのは、なぜ彼らがそういう

ふうにならしたのか、という理由の部分です」

自伝に描かれた人生は、当時の社会・経済状況、文化や習慣など、さまざまな背景の重なりの上に現れる。ビティヒ先生はドイツと日本で過ごした大学院時代に、自伝からその人物の物語と時代を読み解く面白さに惹かれていった。

2015年にまとめた博士論文では、戦後日本の起業家ら4人の自伝を分析。

「敗戦し何も無くなった日本が彼らの出発点になりました。そして戦後から高度成長期にかけて大きく変わっていく日本に、新しい文化と市場を生み出した。そんなところに惹かれました。特に興味を持ったのは、終戦直後に起業した会社を世界的な女性下着メーカーに育てた、塚本幸一の自伝です。同世代の

学びをもっとおもしろく

他の自伝とは違って、塚本は自身の戦争体験も詳しく書きました。でも結婚や家族などプライベートなことにはあまり触れていません。私的な面は見せず仕事のことがり書くのは、その頃の日本人男性にとっては自然な感覚なのかもしれませんね」

塚本への関心は、これからの研究にもつながっている。

「まず進めたいプロジェクトの一つが、塚本自伝のドイツ語出版版です。翻訳に博士論文以降の論考を加えて二冊にまとめた」と考えています」

自伝研究ではもう一つ、ある死刑囚が獄中で書き残した自伝の研究も進める。冤罪を主張しながらも刑の執行を受けた囚人。彼が何を思い、何を記していたのかを探る。

「また今後は、家族に宛てた手紙などから、囚人たちが考えた

ことや感情の変化を分析するような研究にも取り組みたいと思っています。今までの研究とは違うアプローチを探す必要があるかもしれませんが、それをもっと楽しみたいです」

新たなテーマに興味を広げ、研究に取り組むビティヒ先生。学生たちには、どんなことを期待しているのだろうか。

「学生時代に、何か熱中できるものと出会って欲しいですね。そしてドイツ語を勉強するにも、たとえば映画が好きならドイツの作品を観るなど、楽しみながら、生きたドイツ語を学んで欲しい。純文学を読め、とは言いません。トーマス・マンやゲーテは、ちゃんと授業で読みますから」(笑)

毎週のオフィスアワーもぜひ活用してもらいたいと話す。

「学生にとって身近な存在になりたいですね。交流しながら、私自身もみなさんから学んでいきたいと思っています」

My Favorite Foods

ビティヒ先生の故郷は、ドイツ西部の工業都市・ボーフム。おすすめの郷土料理として紹介してくれたのは「カレーヴルスト Currywurst」です。ヴルストとは、ドイツ語でソーセージのこと。焼いたソーセージにカレーソースやケチャップをたっぷりかけ、フライドポテトなどを添えたもので、気軽に食べられるひと皿として親しまれています。

ちなみに先生にとっての「初めての和食」は、学生時代に日本を訪れた際、友人に連れられて行った中野ブロードウェイで食べた牛丼(みそ汁付き)だったそう。その後「留学していた約一年間は、ほとんど毎日食べていました。ねぎだく・つゆだくにしてもらってね(笑)。いつも通っていたお店では店員とも顔なじみになり、お互いの名前を覚えるほどでした」。留学中に食べたM屋の牛丼、約260杯。紅生姜はちょっと苦手だそうです。